

塚腰遺跡 (第 3 次発掘調査)

所在地 鈴鹿市郡山町字広山 479 番 1, 480 番 1  
 調査目的 作業所建築に伴う埋蔵文化財の記録保存  
 調査期間 平成 28 年 4 月 5 日～平成 28 年 4 月 25 日  
 調査面積 71.3㎡  
 調査主体 鈴鹿市  
 調査担当 藤原秀樹・太田有香



図 1 塚腰遺跡と周辺の主な遺跡 (1/25,000)  
 ※国土地理院 2 万 5 千分の 1 地形図「白子」を使用

1 遺跡の位置と周囲の環境

塚腰遺跡は、鈴鹿市の南部を流れる中ノ川の右岸に広がる中位段丘上に位置します。「郡山」の地名が残り古代菟藝郡の中心として郡家が置かれていたと推定されていますが、郡家は酒井神社付近にあったと推定されていますが遺跡は未確認です。

調査地南側の丘陵地では太陽の街ニュータウン造成に際して大規模な発掘調査が行われました。縄文時代の集落西川遺跡・追谷遺跡、西高山 A～D 遺跡・末野 A～C 遺跡といった古墳時代後期から奈良・平安時代および鎌倉時代の大規模な集落遺跡、古墳時代の須恵器生産が行われた徳居窯跡群の 4 基、前方後円墳西高山 2 号墳を含む古墳 4 基等が確認され、郡山遺跡群として知られています。

遺跡北東の天栄中学校の付近に前方後方墳の可能性のある赤郷塚 2 号墳が所在します。赤郷遺跡では弥生時代の環濠が確認されています。畑遺跡では古墳時代前期の竪穴住居と中世の溝状遺構などが確認されています。南に接する松山遺跡では古墳時代前期の竪穴住居と方形周溝墓（墳丘墓）2 基が確認されています。伊勢鉄道東側の中瀬古南遺跡では古墳時代前期の竪穴住居と鎌倉時代の掘立柱建物・土壙墓が確認されています。大門遺跡においても古墳時代の竪穴住居が確認されています。

遺跡の東方約 0.1km には全長 35.7 m の帆立貝式前方後円墳経塚古墳が所在します。主体部からは大量の鉄製武具・農耕具等が出土したことで注目されています。

塚腰遺跡ではこれまでに 2 回の調査が行われています。市道建設にかかる第 1 次調査では、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓 2 基が確認されました。また、個人住宅建築に係る第 2 次調査では古墳時代前期の竪穴住居 1 棟、飛鳥時代の掘立柱建物 2 棟などが確認されました。その他旧石器時代の角錐状石器も出土しています。

## 2 調査に到る経緯と経過

今回の調査は作業所の建築に伴うもので、事業者から提出された発掘届に基づき、平成 28 年 3 月 2 日に範囲確認調査を実施しました。竪穴住居の可能性がある方形の落ち込みと柱穴が確認されました。検出した面は現地表から 0.5 m と浅く、基礎工事と浄化槽埋設により遺構が破壊される可能性があるため、該当部分 71.3m<sup>2</sup>のみを調査対象として本発掘調査を実施することになりました。

本発掘調査は平成 28 年 4 月 5 日の表土除去から始まり、4 月 11 日から作業員を投入して遺構掘削作業等を行いました。遺構掘削作業は 4 月 19 日に終了しました。遺構実測等の記録作業は 4 月 20 日で終わり、4 月 25 日に小型重機を用いて埋め戻し、すべての作業は完了しました。

## 3 調査の結果

今回の調査では基礎等の敷設にかかり掘削される部分のみを調査するため、調査区は一辺 12 ～ 13 m の方形に巡るトレンチ状となります。そのため調査区のそれぞれを東・西・南・北辺調査区と地区分けをして作業を進めました。調査地の層序は表土は現在の整地土、攪乱された旧表土が約 0.35 m 堆積しています。その直下が攪乱を受けていないよく締まった黄褐色シルトの基盤層となります。耕作は基盤層に達しており、また西辺では重機のバケットの痕がくっきり残っています。調査は整地・旧耕作土を小型重機により除去し、現れた地山上面で遺構を検出しました。

### 主な検出遺構

#### 古代の遺構

**竪穴住居 1** 東辺調査区で東西方向の幅 0.2 m、検出面からの深さ 0.1 m の細い溝が検出されました。これは竪穴住居に伴う周壁溝とみられ、この溝から北側へ南東隅土坑までの間の地山面が著しく硬化していることから踏み固められた竪穴住居の床面と考えられます。また、南東隅土坑の底部で検出された P34 は他の中世の柱穴とは埋土が異なり、この竪穴の主柱穴の可能性がります。床面ぎりぎりまで削平されているため出土遺物はありません。

**竪穴住居 2** 東辺調査区の北東隅で検出されました。大部分は調査区外に及ぶほか、他の遺構に切られるなどして、床面と壁溝の一部のみ確認できました。検出面から床面の深さは 0.1 m、壁溝の深さは 0.1 m、壁溝の幅は 0.2 m、深さ 0.1 m です。

**竪穴住居 3** 北辺調査区の北壁から東西 3.7 m × 南北 1.0 m にわたり竪穴住居の南辺および南東隅部分を検出しました。検出面から床面への深さは 0.1 m、外周には幅 0.2 m、深さ 0.1 m の周壁溝が巡ります。遺物は周壁溝から土師器甕片が 1 点出土したのみです。

**土坑 1** 南北 1.8 m × 東西 1.5 m 以上で、検出面からの深さ 0.25 m を測る。隅丸長方形の土坑です。埋土には焼土・炭を含みます。出土遺物は土師器甕片が少量のみでした。

**土坑 2-4** 南辺調査区で確認された楕円形で、径 0.8 ～ 1.2 m、検出面からの深さ 0.1 ～ 0.2 m の浅い皿状の土坑群です。埋土には焼土・炭・土器細片を含みます。

**土坑 5** 南辺調査区の南東端に、東西 1.5 m × 南北 0.4 m ほど現れています。竪穴住居の可能性も考えましたが壁が斜めに傾斜していることから土坑と判断しました。埋土には焼土・炭・土器細片を含みます。

#### 中世の遺構

**南東隅土坑** 調査区東辺で範囲確認調査の際に検出されて竪穴住居かとされていた方形の落ち込みです。北・西・南の 3 辺を確認しましたが、東辺は調査区外へと及んでいます。掘削の結果、多量の礫と共に山茶碗・常滑焼甕等が出土し、鎌倉時代の土坑であることが判明しました。深さは検出面から 0.1 m、東西幅は 3.3 m を測ります。埋土には焼土・炭なども多く含んでいます。掘立柱建物 1 との重複関係から中世の建物に伴う南東隅土坑と呼ばれているものと考えられます。その性格については、家屋の一部で馬等を飼育した施設あるいは厨房に伴う排水処理施設ではないか等の諸説があります。

**掘立柱建物 1** 北辺調査区におさまるように東から P1, P3, P4, P5, P6, P7 と柱穴が 5 間分（建物の規模を示すため柱と柱の間を 1 間と呼びます）一直線に並びます。また東辺調査区ではその列に直交して P1, P8, P9 のピット列が、西辺でも P7, P24 と柱が並びます。これらから中世の総柱掘立柱建物の存在が復原されます。桁行（東西）の柱間はほぼ 2.1 m（7 尺）で、西側の P6-P7 間のみが 2.4 m（8 尺）と広く廊にあたる部分とみられ、P7-P24 の柱の並びが建物の西辺（妻）となると考えられます。梁行きは 2.1 m（7 尺）等間のようなようです。このような規模の大きな総柱建物の南東隅に柱間におさまる土坑を伴うものが多く、検出されている南東隅土坑がこれに当たると考えられています。南東隅土坑が調査区外の東に及ぶことから、建物 1 も東にもう 1 間延びて、桁行 6 間あると推定されます。また、梁行（南北）は 3 間以上であることは間違いありません。南東隅土坑の遺物から鎌倉時代のもと考えられます。

**掘立柱建物 2** 南辺調査区においても東西に直列する P10, P20, P22, P35 の柱穴列と、直交する P10-P13 の柱穴列が確認でき、総柱掘立柱建物の存在が推定されます。規模は東西 3 間以上×南北 2 間以上としかいえません。柱間は 1.8 m（6 尺）等間と見られます。同時代のもので推定されますが、柱の並びの方位が建物 1 とは振れており同時に存在したものではなさそうです。

### 出土遺物

遺物は、遺物整理箱に 4 箱ほど出土しました。大部分は南東隅土坑から出土しました。山茶碗・山皿・鉢、常滑焼甕が大部分を占めます。鎌倉時代のもので、土鍋や皿など土師質の土器が少ないこと特徴的です。また白磁・青磁などの舶載陶磁器も見られませんでした。

興味深い遺物としては、攪乱層からですが滑石製の石鍋（おそらく長崎県西彼杵半島の産）が出土しています。鎌倉など関東まで流通していることが分かっていますので特殊なものとは言えませんが、この地域での出土はまれな遺物です。

古墳時代後期～奈良時代の遺物については土坑などから須恵器・土師器といった土器類が少量出土しましたが小さな破片が大部分でした。

## 4 まとめ

調査の結果、竪穴住居 3 棟と、総柱の掘立柱建物 2 棟を検出しました。

竪穴住居は古墳時代後期～奈良時代にかけてのもので見られます。調査区の関係から全体像は確認できませんでしたが、付近には同時代の住居跡が広範囲に分布しているとみられます。

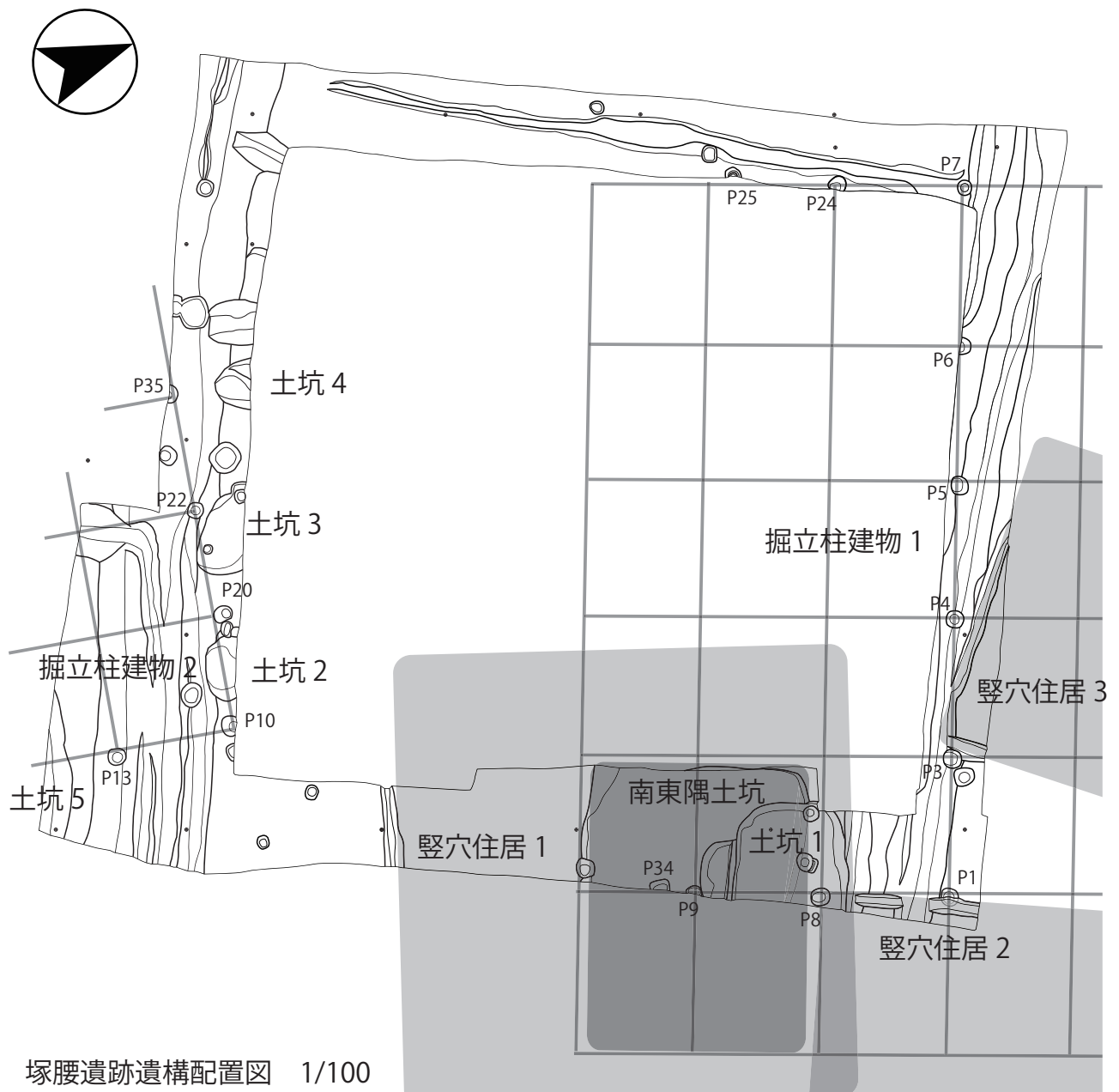
後者の内 1 棟は、桁行 6 間×梁行 3 間以上と比較的規模の大きな建物です。建物に伴う南東隅土坑から出土した遺物から鎌倉時代に営まれた住居です。鎌倉期の一般集落の住居は 4 間×3 間や 3 間×2 間程度のもので、このような規模の大きな建物は市内では郡山町末野 C 遺跡、国府町梅田遺跡など限られた遺跡で確認されているだけです。郡山町付近には御蔭町の地名にも残るように神宮関係の荘園が多く存在したことが知られています。この掘立柱建物も荘園の荘官を務めるなどした在地の有力者の居宅の一部ではないでしょうか。



南東隅土坑（東から）



竪穴住居 2（西から）



塚腰遺跡遺構配置図 1/100



南辺調査区掘立柱建物 2 (東から)



北辺調査区掘立柱建物 1 (西から)



東辺調査区 (北から)